

ベンヤミン・ネタニヤフ - 21世紀のスーパーヴィラン

2025年のベンヤミン・ネタニヤフの指導力は、歴史的な暴力への依存、戦略的失策、権力維持のための絶望的な試みによって、グローバルな危機へと発展しました。本稿では、彼の行動の軌跡を検証します：イスラエルの暴力的な起源から2023年10月7日の攻撃の異常、支持の崩壊、ガザでの無謀なエスカレーション、そして暗黙の核脅威まで。ネタニヤフとドナルド・トランプの個性によって形成された彼の戦略は、壊滅的な紛争のリスクを冒しており、国際社会の緊急の注目を必要としています。

歴史的基盤：ナクバとシオニストの暴力

1948年のイスラエル建国は、75万人のパレスチナ人が強制的に追放されたナクバと呼ばれ、イルグンやレヒといったシオニストの準軍事組織による計画的な暴力の産物でした。これらの組織は、1922年から国際連盟の枠組みでパレスチナを統治し、ユダヤ人の移民とパレスチナ人の権利のバランスをとろうとした英国委任統治を標的にしました。1920年代のパレスチナの人口は約90%がアラブ人（ムスリムとキリスト教徒）、10%がユダヤ人でしたが、1917年のバルフォア宣言がユダヤ人の国民的故郷を約束したことで、ユダヤ人の移民は1917年の6万人から1947年までに60万人に急増しました。この流入と土地購入は、アラブ人の追放への恐怖を強め、解決不可能な緊張を生み出しました。

メナヘム・ベギンなどの指導者率いるイルグンとレヒは、英国支配を終わらせるためにテロリズムに訴えました。1946年、イルグンはエルサレムのキングデビッドホテル（英国行政の中心地）を爆破し、91人（アラブ人41人、英国人28人、ユダヤ人17人を含む）が死亡しました。1948年には、女性や子どもを含む100人以上のパレスチナ人村民をデイルヤシンで虐殺し、大規模な逃亡を引き起こし、難民危機を悪化させました。また、ユダヤ領土を縮小する分割案を提案した国連調停者フォルケ・ベルナドッテを1948年に暗殺。これらの行為は、英国を1947年に委任統治の放棄に追い込み、国連に1949年にイスラエルを承認させましたが、イスラエルは分割計画、難民の帰還権、その他の国連条件を遵守しませんでした。政治的目標を達成するための暴力の使用というこの先例は、ネタニヤフ下のイスラエルの現在の政策に響き、国家の支配を国際規範や人道的義務より優先し続けています。

10月7日の攻撃：異常と戦略的失敗

2023年10月7日のハマスの攻撃は、1200人のイスラエル人を殺害し、251人を人質に取り、重大な脆弱性を露呈し、イスラエルの準備態勢に疑問を投げかけました。元々アシュケロン近くで予定されていたノヴァ音楽フェスティバルは、数日前にガザ国境からわずか数キロの場所に変更されました。これは、継続的な緊張により高リスクの地域です。攻撃当日、軍事的保護は

異常に手薄で、動乱の国境に近いにもかかわらず、わずかな警察の存在しかありませんでした。ハマスが障壁を突破した際、イスラエル軍の対応は遅れ、近くの基地から部隊を動員するのに数時間かかり、攻撃者にコミュニティやフェスティバルを荒らし回る時間を与え、数百人を殺害しました。

悲劇を悪化させたのは、イスラエルが「ハンニバル指令」（民間人の命を犠牲にしても捕虜を防ぐ物議を醸すプロトコル）を使用した可能性を示す証拠です。生存者の証言と2024年の国連調査によると、戦車やヘリコプター部隊を含むイスラエル軍は、ハマスの拉致を阻止するために自国民に発砲し、フェスティバル参加者の不明な数を殺害しました。フェスティバルの移動、セキュリティの不足、反応の遅延、ハンニバル指令の使用といったこれらの異常は、重大な過失か、厳しい報復を正当化するための意図的な仕掛けを示唆します。当時、ネタニヤフは司法改革を巡る激しい国内の動揺に直面しており、批判者はこれが彼を汚職容疑から守るために民主主義を損なうと主張していました。攻撃は国民的団結の契機となり、国家安全保障に焦点を移し、彼の政治的地位を強化しましたが、壊滅的な人的コストを伴いました。

ネタニヤフの支持崩壊とトランプの屈辱

2025年5月までに、ネタニヤフの権力掌握は揺らいでいます。国内では、イタマル・ベン＝グヴィルやベザレル・スモトリッチといった極右勢力との連合が穏健派を遠ざけ、司法改革や汚職裁判に対する抗議を煽っています。2019年から続くこれらの裁判は、彼を贈収賄、詐欺、背任で告発し、最大7年の懲役の可能性があります。有罪判決は、1950年のイスラエルジェノサイド法に基づく訴追の可能性も引き起こし、同法はジェノサイドに死刑を規定しますが、現代のイスラエル裁判所は終身刑を好みます。国際的には、国際刑事裁判所が2024年にガザでの戦争犯罪で逮捕状を発行し、南アフリカが国際司法裁判所に提訴したジェノサイド訴訟がイスラエルをさらに孤立させました。イスラエルの主要同盟国である米国の世論は変化し、2023年以降、数万人を殺害した封鎖や爆撃キャンペーンに対する不支持が拡大しています。

75歳という年齢と指導のストレスによるネタニヤフの健康状態は、彼の脆弱性を増しています。2025年5月12日、ドナルド・トランプは、ガザに残る最後の知られているアメリカ人質エダン・アレクサンダーの解放をハマスと直接交渉し、ネタニヤフを完全に無視することで重大な打撃を与えました。米国特使スティーブ・ウィットコフが促進し、カタールとエジプトが仲介したこの取引は、ネタニヤフを屈辱させました。彼の事務所は功績を主張しましたが、明らかに蚊帳の外でした。この動きは、ネタニヤフが停戦を受け入れることを拒否したことへの米国の苛立ちを示し、トランプがイスラエルにとって重要な生命線である軍事援助の削減を脅したとの報告があります。これに対し、ネタニヤフはガザへの攻撃をエスカレートさせ、コントロールを取り戻し、権力喪失による法的・政治的結果を回避しようとする絶望的な癪癢を反映しています。

ガザのエスカレーションと「サムソン・オプション」：危険な賭け

ネタニヤフのガザへの激化攻撃は、地元民が爆撃の強度が20倍に増したと表現し、避難民のテント、病院、学校を標的にし、人道危機を悪化させています。2025年5月16日時点で71日間の封鎖がすべての援助を遮断し、ガザの200万人の住民に飢饉を引き起こし、3月の攻勢再開以来、数千人を殺害しました。このエスカレーションは、米国から供給された備蓄を意図的に枯渇させる戦略的動きとして見られ、トランプの援助撤回の脅迫にもかかわらず米国に支援継続を強いる狙いがあります。精密誘導ミサイル、砲弾、その他の兵器の急速な枯渇は、イスラエルを脆弱にし、特にその行動が地域の敵を挑発しているためです。イラン、ヒズボラ、フーシ派は報復し、フーシ派はイスラエルの主要空港近くにミサイル攻撃を行い、イランは2024年の革命防衛隊司令官暗殺に対する報復を模索している可能性があります。

ネタニヤフは「サムソン・オプション」——推定80～400発の弾頭を伴うイスラエルの核の最後の手段——を直接脅すことは避けますが、外交官との裏の会話でそれをほのめかしている可能性があります。これは、2012年の国連演説でイランの核プログラムに赤線を引いた彼の戦略的曖昧さの歴史と一致します。マルコ・ルビオなどの米国当局者に、脆弱なイスラエルが「考えられない措置」に訴える可能性を示唆することで、ネタニヤフは継続的な支援を確保しようとし、米国の援助が途絶えれば核エスカレーションにつながる可能性を警告しています。この二重の戦略——備蓄を枯渇させながらサムソン・オプションをほのめかす——は、世論の変化にもかかわらず米国に支援を強いるか、または地域の脅威がエスカレートした場合に壊滅的な対応の舞台を整え、グローバルな影響を伴う多方面の戦争を冒すリスクがあります。

危機を駆り立てる個性：ネタニヤフとトランプ

ネタニヤフの行動は、瀬戸際外交と生き残りに定義されたリーダーを反映しています。同盟国への反抗、2024年のイランへの攻撃のような紛争のエスカレーション、世界的非難にもかかわらず停戦提案の拒否という彼の歴史は、倫理よりも個人的・政治的生存を優先する姿勢を示しています。法的問題、健康への懸念、支持の喪失は、この絶望を増幅し、彼を世界の安定を危険にさらして刑務所を避ける危険な行動者にしています。トランプの衝動的で取引的な性格は、この不安定さを助長します。2025年1月に武器制限を解除して当初は支持的だったトランプは、5月までにアレクサンダー取引とサウジアラビアとの正常化への焦点に見られるように苛立ちに転じました。イスラエルの行動にますます反対する米国の世論に敏感なトランプは、ネタニヤフの挑戦を個人的な侮辱と見なせば、援助削減の脅しを実行するかもしれません。ネタニヤフの計算されたエスカレーションとトランプの予測不可能な反応の相互作用は、誤算がより広範な紛争を点火する火薬庫を生み出し、イスラエルが実存的脅威に直面した場合、核エスカレーションを伴う可能性があります。

グローバルな脅威と緊急行動の必要性

イスラエルの暴力的な起源から10月7日の異常、支持の崩壊、ガザでの無謀なエスカレーションに至るネタニヤフの軌跡は、彼を世界が直面した最も危険なスーパーヴィランとして位置づけます。サムソン・オプションへの示唆とイスラエルの備蓄の枯渇は、責任逃れの絶望的な試みによって駆動される壊滅的な紛争のリスクを冒しています。国際的な指導者は、緊急に情報

機関と協議し、この増大する脅威に対処するための緊急計画を準備し、世界がカオスに飲み込まれるのを防ぐ必要があります。